

第六章 物部神社

104

當社は安濃郡川合村大字川合の八百山の鎮座であらせられます。乃ち山陰線石見大田驛から佐比賣方面へ行くバスに乗つて道を南に走れば、大田町を過ぎて静間川を溯ること一里餘、國立の牧場を右手に眺めて静間忍原兩川の相合する所、即ち所謂川合の地に至ると山川依稀として千年の傳を傳へるに似て蕭然石見一宮の社頭を出現するのであります。

當社は物部氏の祖神宇摩志麻遲命を奉齋する上代以來の古社で、社殿は繼體天皇の八年九月の創建と傳へ、その後文龜・天正等の再建が行はれましたが、享保三年川合村の民家が火を失して、本殿拜殿等に延焼した。よつて爾來假殿に奉遷し、居ること二十年、延享三年寺社奉行大岡越前守、幕命を以つて出雲・因幡・伯耆・安藝・周防・長門の七國に勸化して再建することを許可したので、遂に寶暦元年十一月起工し、同三年三月本殿・拜殿・諸末社竣工して四月遷座祭を執行したが、廳舎・寶庫・書庫・神輿・樓門の五字は再建に至らず、長く廢絶に歸してしまつたのであります。

當時の本殿は高さ五丈三尺、桁行一丈九尺八寸、梁間二丈三尺八寸、椽出(左・後六尺、前・右四尺五寸)前拜出一丈三尺四寸、同梁間二丈三尺八寸、欄干高さ二尺六寸五分、屋根檜皮葺八十八坪五合、また拜殿は

向造、桁行三丈九尺八寸に梁四丈一尺五寸、高さ三丈八尺、屋根檜皮葺百六坪七合であつたが、その後文政十年四月、安政三年十一月、明治三十二年四月、昭和十三年十月御修造を行ひ、殊に昭和の御修造は從來寺院の本堂にも匹敵する宏大な建築で、屋根は所謂石州瓦の赤瓦葺きになつて居り、乃ち石見特有の説教場的様式なりしを、檜皮葺の近代神社の様式に則つて改築されたのであります。又明治十八年には祭器庫を再建し、同二十二年には參籠所、同二十五年には社務所を改築されたのであるが、これが今日の規模の大様であり、境内凡そ四千坪、千木高知れる本殿を蔽うて翁蔚たる八百山は千年の翠をたたへて、宏壯なる社殿と相映發し、縣下神社中において稀に見る景觀を呈して居るのであります。

攝社

後神社 祭師師長姫命 (境内)

中原若宮社 祭神彦湯支命 (境外)

末社 (境内九社、境外八社の内)

郷原若宮社 祭神味饒田命 (境外)

新屋若宮社 祭神武諸隅命 (境外)

川合神社 祭神竹子命 (境外)

105